

水口岡山城跡第3次発掘調査

（伝本丸南側斜面と伝三の丸虎口の調査）



写真1 伝三の丸虎口（2トレ）の下段の石階段（南西から撮影）



写真7 2トレ上部の石階段（西から撮影）



写真8 虎口内の石積み（西側）と陶磁器出土



写真9 寺院から転用した瓦

【水口岡山城の歴史】

天正13年（1585）4月、羽柴秀吉（のちの豊臣秀吉）は紀州攻めに動員した甲賀衆（中世以来、甲賀郡に在住した土豪たち）を改易（武士の身分をはく奪する）処分としました。その直後、秀吉は中村一氏を泉州岸和田から水口へ移し、大岡山（現在の古城山）に城を築かせました。それが、水口岡山城です。

一氏は、水口岡山城の城主となると同時に八幡山城（近江八幡市）を築城した秀吉の甥秀次の家老に任命されました。一氏のほか、田中吉政（八幡山城）、堀尾吉晴（佐和山城）、山内一豊（長浜城）、一柳直末（大垣城）が秀次付きの家老となっています。水口岡山城が築城された天正13年段階では秀吉に敵対する東海の徳川家康や関東の北条氏を睨み、近江国は東国制覇の重要な拠点と位置づけられていました。東海道を眼下に見据え、鈴鹿峠を望む立地にある水口岡山城は、まさに東国への足掛かりとして戦略的に重要な城のひとつだったのです。

天正18年、北条氏を倒し、天下をほぼ手中におさめた秀吉は、一氏を駿河国駿府城へ移し、増田長盛を水口岡山城の城主とします。さらに、文禄4年（1595）には長束正家を城主とします。二人とも豊臣家の五奉行のひとりでした。

しかし、慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いの後に廃城となり、家康は水口を直轄地とします。豊臣政権の象徴であった山城は破城となります。天和2年（1682）に水口藩の成立以降は御用林となり、一般の人々の入山は禁じられました。

【2トレ】

伝三の丸の南辺中央付近に方形に凹む箇所があり、調査前から虎口の可能性が考えられたため、構造確認のために調査を行いました（2トレ）。

その結果、虎口の構造は平入りで、上部と下部に石階段があったことがわかりました（写真1・7）。

また、虎口内には平坦面があり、礎石の存在を確認しました。虎口内に門があったことがわかります。礎石間の距離から門の間口は約4.5m（2間半）であったと想定され、かなり立派な城門であったと可能性が高いです。ただし、瓦が出土しないため、瓦葺きの門ではなかったと考えられます。

虎口内に多くの石が散乱しており、壁面には石積みが存在したと考えられます（写真8）。崩れた石の間から朝鮮系の陶磁器が出土しました。破城の際に廃棄されたものとみられます。

【今回の調査でわかったこと】

1. 伝三の丸虎口の構造が判明、城門の存在が確定

伝三の丸虎口（2トレ）は、上下に石階段をもつ平入りの虎口で、城門を伴ったことが判明しました。

平入り虎口は、儀礼的な虎口と考えられ、伝三の丸が居住空間であった可能性も出てきました。また、城門の間口が2間半（約4.5m）あり、立派なものであったことがうかがえます。ただし、瓦葺ではなかったようです。

2. 伝本丸の全周に石垣がめぐることが確定

1-2トレで崩された石垣の痕跡を確認しました。平成25年度の第2次調査で検出した上段の石垣の状況および伝本丸北面に残る石垣の様相から、伝本丸の全周に石垣がめぐることが確実にになりました。

また、1-1トレの調査成果から推定大手道より西側の伝本丸南側斜面の裾部分については岩盤を削り出して石垣と同じような効果を狙ったと考えられ、第2次調査の下段部で検出した低い腰巻石垣との違いから、岩盤が利用できる箇所は石垣を構築せずに岩盤を削って利用したものと推測できます。

3. 築城時の資材不足を補うために寺院から多くの瓦を転用したことが判明

1-1トレから「妙法寺」銘の軒平瓦が出土しました（写真9）。また、それ以外にも寺院から転用したとみられる瓦が多く出土しています。瓦当面に寺院の名前がある瓦まで転用していることから考えて、資材不足を補い、急ピッチで築城された様子がうかがえます。また、鬼瓦も出土しています。鬼瓦の文様は全容が掴めませんが、同様の特徴は勝龍寺城（長岡京市）や坂本城（大津市）などで出土している宝塔文鬼瓦にみられ、これらも寺院から転用された瓦と言われています。

編集 甲賀市教育委員会 平成27年（2015年）4月19日発行
問い合わせ先 甲賀市教育委員会事務局 歴史文化財課
〒520-3393 滋賀県甲賀市甲南町野田810番地
電話：0748（86）8026 FAX：0748（86）8216



図1 水口岡山城跡第3次調査 調査対象地位置図 1:3,500 縄張り図は高田徹氏作成(『甲賀市史』第7巻よりを引用)

【調査の位置と目的】

今回の調査は、伝本丸の南側斜面と伝三の丸^{こくち}虎口を対象としました。伝本丸の南側斜面では、推定大手道^{おおてみち}を境に斜面が上下2段に分かれており、斜面の構造把握を目的として調査区を設定しました(1-1トレ・1-2トレ)。また、伝三の丸虎口では虎口構造の確認を目的としました(2トレ)。

【1-1トレ】

伝本丸南側斜面裾部にて多くの崩落した石の堆積を確認しました(写真2)。これらの石を除去していくと、ほぼ垂直に削り出された岩盤が現れました(写真3)。崩落した石には石垣の築石と裏込石が混在しており、上方から崩落して斜面の裾に堆積したとみられます。破城によって崩された石垣の様子を示していると考えられます。

検出した岩盤の状況から、この部分では斜面に石垣を築かず、岩盤を削り出して同様の効果を狙ったと推測されます。



写真2 崩落した石垣(1-1トレ 南西から撮影)



写真3 岩盤と崩落石垣(1-1トレ 南西から撮影)



写真4 1-2トレ崩落石垣上層(南東から撮影)



写真5 1-2トレ崩落石垣下層(南東から撮影)

【1-2トレ】

推定大手道の帯曲輪面に石垣が崩落した状況を確認しました。

崩落した石の堆積は上層と下層に大別できます。上層には裏込石とみられるこぶし大の栗石が多く堆積し(写真4)、下層には築石とみられる大きな石が多くあります(写真5)。この状況は、破城によって石垣が崩された状況を示していると考えられます。破城で石垣を崩す際には、前面に出ている築石を崩し、その後、裏込石を崩します。下層に築石、上層に裏込石という堆積の様子は、まさに破城の状況そのものと言ってよいでしょう。

崩落した石の状況から帯曲輪面から上方へ石垣が立ち上がっていたと推測できます。ただし、今回の調査では本来の石垣(崩れていない石垣)を確認することはできませんでした。石垣の基底部はもう少し斜面の奥のほうにあると想定できます。これは平成25年度に実施した第2次発掘調査で確認した状況と同じであり、伝本丸南面の石垣は、徹底的に崩されて埋没していることが改めて確認できました。



写真6 伝三の丸虎口(2トレ) 門礎石(左側の二人が立つ石)と石階段(西から撮影)